
機動戦士ガンダムSEED SENTINEL

SEED

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダムSEED SENTINEL

【Nコード】

N3841B

【作者名】

SEED

【あらすじ】

自分なりに考えたSEEDDESTINYの続編です。

プロローグ

C・E71、C・E73二つの戦争の傷跡から徐々に癒えつつある矢先、C・E75プラントが地球連合軍並びオーブ軍に宣戦を布告、先の大戦と同じく膠着状態に陥った。

この状況を打破するために、オーブ軍は新型MSの開発に着手した。オーブ本土にて開発ならびに性能テストを執り行った。だが一つ問題が起きた。その新型MSのドラグーン・システムを扱える人がいないのだ。

オーブ軍にはキラ・ヤマト、ムウ・ラ・フラガがドラグーン・システムを扱えるが先の大戦でストライクフリーダム、アカツキを駆っている二人はこれを辞退。オーブではありえない事をする事になった。

それは、ドラグーン・システムを扱える人を探し出し、扱える人がいたら軍に徴兵することだった・・・。

プロローグ（後書き）

読んでいただいております。ご意見、ご感想をどうか
宜しく願います。

PHASE 1 その名はインフィニティ part 1

アレン「全く、冗談じゃねえよ。」

そう呟いているのは、オーブのガレッジスクールの学生、アレン・ボルフィード。

エレン「アハハ……。でもこれは仕方ないじゃないかな。」

アレンの同級生、エレン・ハンムがこれに答える。

今は新型MSのドラグリーン・システムの適性検査である。

アレン「ま、この新型MSが今の戦争の状況を打破できるならいいんだけどな。」

そういつていると……。

キラ「はい。つぎは……。アレン・ボルフィード君。」

アレン「げ、もう俺？」

エレン「アレン、がんば！」

あんまり、オーブ国民は頑張りたくない物だ。

げんなりした顔でアレンは、新型MSの近くに来た。

ムウ「ま、そうげんなりなさんな。適性しなければいいんだから。」

アレン「まあそうですけど。」

キラ「アレン君は第1世代のコーディネーターだね。」

アレン「あ、はい。」

ムウ「よし、それじゃ、MSに乗れ。」

アレンは黙ってそのMSにのった。

既にOSは起動中のようなだった。

アレン「えっと、ドラグーンの発射は……。このボタンか。」

ポチ

ガゴン！

ムウ「ドラグーンの発射を確認！」

周囲からは「おおう。」と関心しているようだ。

キラ「よし！アレン君！次の段階にいくよ。」

アレ「次の段階？」

ムウ「あそこにダミーバルーンのムラサメがある。あれをドラグーンで撃ち抜け。」

アレ「あれか。」

スピュン！

ズビィ！

すると、ぽかぁん！とダミーバルーンが爆発した。

キラ「ムウさん！」

ムウ「ああ！アレ・ボルフィード！ドラグーン・システムの適性を確認！お前を・・・。」

PHASE 1 その名はインフィニティ part 1 (後書き)

読んでいただきありがとうございます。ご意見、ご感想を宜しく
お願いします

PHASE 1 その名はインフィニティ part 2

アレン「!! 警報!!」

オーブ兵「ヤマト一尉!! ザフトの襲撃です!!」

アレン（ザフトだと! 本土の守備隊は何を!）

キラ「数は!」

オーブ兵「はい! 今のところ、ジンがフライトユニットに乗って10はこっちに。」

突然の警報で周囲は騒然としている。

ムウ「おい! 俺とキラのムラサメは!」

オーブ兵「フラガ一佐とヤマト一尉のムラサメはまだ格納庫です。」

キラ「残りは?」

オーブ兵「守備隊と交戦中です。」

つまり足止めを喰らっているということ。

ムウ「くっそ、足止めか! おまけに今出せる機体はインフィニティしかねえぞ!!」

ちなみにインフィニティとは今アレンが乗っているMSのこと。

キラ「すぐに、民間人をシェルターへ!!」

オーブ兵「りよ、了解です。」

オーブ兵の案内で近くのシェルターに移動しているが……。

エレン「あ、ああああ……。」

アレン「エレン!!」

アレンはMSから降りると、エレンに近くに行った。

アレン「くっそ! ショック症状か!!」

キラ「アレン君!!」

キラはアレンのそばに付いた。

アレン「エレンは今、ショック症状に陥っています。」

ムウ「なってこった。」

愕然とするムウ。

アレン「俺はインフィニティで出ます！」

ムウ「お、おい坊主！！いくらなんでもそれは無理だ！第一お前M S訓練うけてないんだぞ！！」

アレン「それは民間人の共通です！！やってみなければわかりません！！エレンを頼みます！」

アレンはそう言って走り出し、インフィニティに乗り込んだ。

アレン（うまく扱えば良いが）

アレン「危ないぞ！道を空けろ！！」

アレン「アレン・ボルフイード。インフィニティ出るぞ！！」

アレンはそう言うと、向かっているジンへ移動した。

キラ「ムウさん！」

ムウ「もう仕方ないか。くっそ！アークエンジェルは！」

オーブ兵「もうそろそろかと。」

キラ「僕達のムラサメを急いで持つてきて早く！！」

オーブ兵「了解！」

ムウ「坊主・・・、死ぬなよ・・・。」

ムウは言うのと、自分のムラサメの到着を待った。

PHASE 1 その名はインフィニティ part 2 (後書き)

読んでいただきありがとうございます。ご意見、ご感想を宜しく
お願いします。

PHASE 2 正義の大天使 part 1

アーケエンジェル

ミリアリア「艦長!!」

マリュー「どうしたの!!」

ミリアリア「フラガ一佐から入伝! オーブ本土はザフトの襲撃を受け、守備隊は足止めにあい、ジン10が侵入、民間人がインフィニティに搭乗並びに、その迎撃にむかったとのこと。さらにヤマト一尉とフラガ一佐のムラサメはまだ出撃できず。とのことですよ!!」

マリュー「そんな・・・。」

アスラン「インフィニティだけが!」

ミリアリア「はい!!」

アスラン「くっそ! こちらが出払っている最中にか!」

シン「裏をかかれたって事かよ!!」

マリュー「インフィニティのパイロットは!」

ミリアリア「既にドラグーン・システムが使える人物とのことですよ!!」

ルナマリア「適性検査が終わった直後って事!」

シン「くっそー!!」

シンはブリッジを出ようとした。

アスラン「シン! どこ行くつもりだ!」

シン「ムラサメで出ますよ!! 先にオーブに行ってます!!」

マリュー「待ちなさい、アスカ一尉!!」

シン「ですが!!」

マリュー「気持ちはわかります。ですが今は、守備隊の支援をしてからです。」

アーケエンジェル内はとても焦っていた。

オーブ本土

アレン「くっそ！こいつら！！」

インフィニティに乗ったアレンはジンの迎撃をしていた。

アレン「使える武器は？」

ザフト兵「甘いぞもらった！」

敵が重突撃機銃を構えた。

アレン「やられてたまるか！」

ザフト兵「クッ、よけられただと！」

この隙にアレンは使える武器を探していた。

アレン「武器は？アーマーシュナイダーとビームライフル、イーゲルシュテルン、重力適性になっているドラグリーン・システムだけか。」

そう言うアレンはアーマーシュナイダーを取り出して・・・。

アレン「こいつ！！」

スラスターをかけ、一気にジンの高さと同じになった。

ザフト兵「なっ、何ー！」

そして

アレン「はぁー！！」

ジンのコクピットにアーマーシュナイダーを刺した。

ボカアン

アレン「あと9機！！」

ズビィ

アレン「！ビームライフル！？」

キラ「アレン君！大丈夫！？」

ムラサメに似た機体。ムラサメではあるが、第1次、第2次ヤキン・

ドゥーエ宙域戦にて猛威を振るった、フリーダムに似ているからだ。

ザフト兵A「ふっ、フリーダム！？」

ザフト兵B「ば、馬鹿な！？何故フリーダムが！？」

ムウ「よそ見してっとしぬぞ！！」

キラ「ムウさん!!」

ムウ「何だ?・・・!ちい増援か。」

アレン「でい、ディンが30!!冗談じゃない!!」

PHASE 2 正義の大天使 part 1 (後書き)

読んでいただきありがとうございます。ご意見、ご感想を宜しく
お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3841b/>

機動戦士ガンダムSEED SENTINEL

2010年10月15日23時56分発行